

■活動レポート

学芸員室より／解説員室より

■学芸員室より

民俗講座「わら細工」について

川向 富貴子（学芸員）

紅葉に彩られた南部曲り屋を舞台に、自然がもつ温もりを通した民俗世界の一端に触れてみませんか。

その取り組みのひとつとして平成12年度に始まった「民俗講座」では、〔平成12年度〕暮らしの中の民俗…麻織物〔平成13年度〕バッテリー村のものづくり…樹皮細工と、これまで「自然との共生」を前提とした活動を続ける方々にご指導いただき、「ものづくり」の実際に挑戦してきました。

これに続き、3度目の開催となる今年度は山形村で「生活民具研究会」を主宰する新谷良造氏を講師にお招きし、「藁細工（草履など）」の技巧を取り上げる予定です。そして、ご参加くださった方々ご自身が製

作に取り組むなかで魅力を探ってゆく、そのお手伝いができればと考えております。

相刈り・脱穀など、精米までのプロセスを同時にこなすコンバインの導入により、近年では「藁細工」のみならず、その材となる「藁」そのものも目にする機会がなくなりました。しかし、少なくとも昭和期中頃まで、「藁」はさまざまな生活の場面に浸透し、少しの無駄もなく活用されていました。たとえば、装身具では蓑や手袋、草鞋、草履などの品目、住居では屋根葺きや土壁の材としての活用が挙げられます。また、かつては器としての活用以外に、団子や香煎といった救急食品の材料として口にもすることもあったと伝えられます。

ちなみに、県北部など、米作りに厳しい自然環境にある地域では「藁細工＝自家消費」との印象が強いと考えられますが、県南部などの穀倉地帯では農閑期の重要な現

金収入の源泉として、藁細工を位置付けていました。殊に、戦時体制化にあっては「藁は兵器」だといわれ、その加工品生産が大々的に奨励されたというご記憶をお持ちの方も少なからずいらっしゃるのではないでしょうか。藁の素材がもつしなやかさ・あたたかさからは想像に難い事実ですが、こうした日本の営みには「藁」は決して米作りの結果生じる副産物の位置づけになく、「藁細工」も極めて合理的な廃物利用の範疇にとどまるものでなかったという実際がうかがわれます。

なお、当講座は来年度以降も継続していく予定ですが、皆様のご要望を参考に、今後ますますの充実を図りたいと考えております。つきましては、ご来館かたがた、お気軽にご意見をいただければ幸いです。よろしく願いいたします。

■解説員室より

「心に残る風景」

青山 陽子

忘れられない風景、心を落ち着かせてくれる風景…様々な思いと共に大切にしている風景を持っている人もきっと少なくないと思います。そして盛岡に住む人、またゆかりのある人に、心に残る風景を尋ねると、きっと多くの人が「岩手山」と答えるのではないのでしょうか。

岩手山はその名のとおりに岩手を代表する東北で2番目に高い2038メートルの孤峰で、その稜線は美しく「南部富士」とも呼ばれています。盛岡市街地からもその姿を眺めることが出来ますが、どこにも勝る絶景ポイントを特別にお教えしましょう。岩手県立博物館です。

当館は盛岡市北部の小高い丘に建っています。長い階段を登り、広い芝生広場に辿り着くと西の方角に岩手山を望むことがで

きます。しかしここで立ち止まっていたはいけません。館内へ入り、更に34段の階段を登ると、そこは博物館2階グランドホール。巨大なガラスのキャンバス一面に広がる岩手山が堂々たる美しさで待っています。その姿に出会った人はあまりの美しさと迫力に圧倒され「わぁー」と声を上げたり、言葉になりません。

グランドホールから望む岩手山は、どの季節でもどの時刻でも美しいのですが、クライマックスはなんとといっても日没の頃です。薄紅、コバルトブルー、緋色、トパー

ズ、紫藍色…日毎、時間毎に違う空の色が、そして時には色彩の協奏曲が岩手山を演出します。ある方はこうおっしゃいました。「出来ることならこのガラスごと岩手山を持って帰りたい」と。またある方は「朝焼けの美しさも楽しむために博物館の守衛になりたい」と。

筆舌に尽くしがたいこの美しい風景をみなさんにもいつかきくと堪能していただきたいと思います。きっとそれはみなさんの心の風景として刻まれるでしょうから…。

